

編集後記 From Editor

「所得格差」と聞く時、まず、その前提となる「労働」、特に「若者の働く意識」について考えてしまう。一〜二年前に登場した「ニート」も今や市民権を得た感がある。無論、職に就きたくても就けずに、やむを得ずその立場に甘んじているケースもあり、むしろ雇用する側の問題だとの指摘もある。しかし、必ずしも皆が求職活動を行っているわけではないというし、それは「条件にはこだわらないが仕事がない」というよりも、「条件（希望する仕事内容、処遇）に合う仕事がない」という理由が多いとも聞く。自分らしさの追求の結果ということかもしれないが、私とは感覚の差が大きく、ごく一部の現象として受け止めたい。しかし、今の大学では、少子化時代の学生確保の一環として、入学間もない時期から「卒業したらしつかり働こう」という講座を開設しているところもあるという。とすれば、決して一部の少数の若者に見られる特異な現象ではないのだろう。

ふと、自分自身はどんな気持ちで働き始めたのかと思ひ起こしてみる。最終学年になるまでは、卒業後の「労働」について考えることは全くなかった。会社訪問の時期が近づいてきた頃、「どこかの会社に就職する」ことが、自分の中で何となくかつ迷いなく決まった。会社概要を調べ、訪問解禁日に真新しいスーツに身を包んで面接を数社受け、数日後に決まった記憶がある。その過程では、どの会社に行こうかということ以外は全く考えなかった。どんな仕事かしたいとか、どんなキャリアを積みたとか、将来どうなりたいとかも考えた記憶はない。自分らしさの追求などは、そんな言葉さえ思い浮かばなかった。当時、「最近では、就職ではなく就社だ」という批判があったが、まさに私の場合は絵に描いたような就社であり、批判は完璧に当たっていた。

就職に関することだけでなく、当時、様々な場面で「最近の若者は」という叱責を聞かされた。多くの場合、図星であったような気がする。そして時が経ち、今度は我々の世代が「最近の若者（の働く意識）は」と憂う。そう考えると、この「最近の若者は」という言葉は、過去から営々と繰り返されてきた言葉であり、誰でも本質的に持ち合わせる自己中心的な価値観の持ち方からくるものなのだと思う。とすれば、最近の若者の働く意識の変化（我々から見れば「問題」）も、要するに時代の流れであり、熟年層があれこれ口出しする必要などないという考え方も、ある意味で的を射ているのかも思ったりする。

以前、我が息子（当時小学生）に聞いたことを思い出す。「早く大人になりたいか？」「なりたくない！」「何故？」「大人になったら働かないといけないから。ネガティブな姿勢を悲しむべきか、それとも、最低限の勤労義務感だけは持ち合わせていることに安心すべきか……。結論はもう少し先に分かる。」

——橋本佳也



若者たちが集う大阪・ミナミのアメリカ村

表紙写真 [上] ソーシャル・インクルージョンの実践例として展開する「スワンベーカーリー」（大東市） [下] 社会起業家をめざす若者を応援するedge実行委員会の活動（大阪市）
裏表紙写真 [左上] HAT神戸の公園で遊ぶ子どもたち [右上] 大阪天満宮のそばに誕生した上方落語の席「天満・天神繁昌亭」
[左下] 石切神社の参道にて（東大阪市） [右下] 京都・上賀茂神社の手づくり市のにぎわい

CEL 78号 特集 ■ 生活者の格差論

発行●平成18年9月30日 頒価1,000円(送料290円)

■発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 真名子敦司 *Atsushi Manago*

■編集人 橋本佳也 *Yosbinari Hashimoto* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18

住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY & LIFE © 2006 OSAKA GAS CO.,LTD

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ [http://www.osakagas.co.jp/cel/] でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで